

第 1 2 回会議で出された主な意見

【北九州市の目指す教育の姿について】

（「1．確かな学力と体力」に関する視点）

基本的な生活習慣の定着がすべての教育の基本。家庭がいい、悪いという問題ではなく、総合的に、特に教育行政としてどう考えるかという問題である。基本的な生活習慣の定着は、「体力や学力の向上」だけでなく、規範意識の向上やすべてに関係がある。北九州版家庭教育資料や家庭学習のプリントを開発し活用すると、家庭教育学級の研修の形態も変わる。自分の子どもや地域の子どもの実態を十分把握しているので、人の話を聞くという受け身の研修から、生活を高める積極的な研修へと変わる。

北九州全体として定着、習慣化が進めば親の子育てへの意欲も増加し、子どもの学校生活も安定し、もちろん体力や学力も必ず向上する。

学力を上げるという場合に、平均点を上げるという考え方なのか、分からない子どもたちをなくすという取り組みになるのかをはっきりさせたほうが良いと思う。

また、児童生徒が平日にほとんど勉強していないという数字がある。単にカリキュラムや先生のスキルをどうかするというレベルを超えているという指摘もあり、具体的な取り組みを考える必要があると思う。

さらに、日本語の力を付けるために読書が大切だと思う。具体的な取り組みの中で、全部の学校に司書を置くというようなことをぜひ打ち出してほしい。これは絶対、北九州の方式ということになるのではないと思う。

親の教育、特に父親をどうするかということである。校長や学校に任せるのではなく、プロが各学校で父親を集め教育問題を討議するようなシステムを作ればよいと思う。

また、運動では、練習しなければうまくなったり、強くなったりしない。勉強も一緒に勉強しないと成績は上がらない。1日30分でも勉強すれば、学力は上がる。体力では、1日10分、各学校で縄跳びをすると、1年後、体力ははるかに上がる。

また、本を読ませるだけでも学力は上がると思う。問題を理解してくると思う。それだけで1年後の北九州は、平均点はかなり上にくると思う。

基本的な生活習慣の定着が一番だろうと思う。人間にはリズムが大切である。朝起きて交感神経が高まって1日が始まる。それに伴い上がってくるホルモンもあれば、消失していくホルモンもある。一定のリズムにしたほうが非常に良くホルモンが出るし、消失する。不規則な生活というのは絶対効果が上がらない。成長ホルモンというのは非常に重要であり、寝たときの一番最初の深い眠りのときに一番よく出る。このため、一定のリズムで寝かしたほうが良い。

「病気を防ぐ習慣づくり」では、「子ども（中学生を中心）へ」と書いているが、「（中学生を中心）」は外してほしい。感染症対策と啓発活動の促進。啓発活動も繰り返さないと子どもは覚えまない。

「声の届かない保護者への一層の働きかけ」について、もっと具体的な施策を考えてもらいたい。できるのに気が付かない親、あるいは知らない親にどう伝えるか。具体的な施策というのを、もっともっと深めていいのではないかと思う。

「確かな学力と体力」の具体的な取り組みの で、「確かな学力と体力」ということを考えたときに、食育を通じたというのがあると、限定されるのではないかと思う。そこで、それを消して「基本的な生活習慣の定着と健全な心身の育成」として、次の主要項目として「効果的な食育の指導」としたほうがよいのではないか。

（「2．子どもの特性を伸ばす」に関する視点）

「少人数学級など教育条件の整備」では、「非常勤講師など教員配置の充実」「退職教員など外部人材の活用」となっている。充実させなければいけないということなので、結果として正規の先生方を雇うのが難しいからかもしれないが、最初から遠慮して言う必要はないのではないか。

（「3．学校の力をさらに高める」に関する視点）

管理職のマネジメント強化では、学校経営をどうしていくのか、学校経営をするということは組織を動かす、校長のみではなく職員一人ひとりが本年度の目標などをしっかり共有して動いていく、そういう展望、方策などをしっかり示していくことが大切。

子どもの動き、職員の動き、保護者の思いや願いに応える、そのために当面何をすべきなのか、何が課題なのか、中・長期的にどうやっていくのかという意味で、しっかりしたマネジメントを発揮しなくてはならない。具体的には、人材の強化等もしてほしい。管理職のマネジメントでは、学校の校長が自分の学校について、いろいろな子どもの実態などがある中で、いかにして学校経営の理念を具現化していくかが問われている。校長がすべて当たるわけにはいかないので、主任・主事を活かしながら、トップダウンとボトムアップをきちんと整理しておく。その組織として当たるという思いを校長は持っておかないといけない。

現場は人手不足と言うが、そうでもない、給料を上げたほうが良いと言われた方もいた。忙しくなったとしても手当等の形で給料を上げてやったほうがいいのかという気もする。人材確保の面では、文科省が副校長、主幹教諭、指導教諭をつくったのは、もとは東京が発端と思う。東京都は管理職になると責任を全部負わされてしまうということで、なり手がいないと聞いた。また、管理職の選考試験は、1.2倍という報告があった。

管理職というだけで責任がかかってくる。今、それに絶え得るだけの教育諸条件が整っておらず、すべて学校長へという風潮になっているため、難しい。北九州では、委員会が基本的に学校をサポートしているので、管理職選考試験の倍率は高いようである。

教職員の長期休職者の6割以上が精神疾患、うつ病という実態がある。向き不向きもあるし、個々人の内因的な素因があって起こす場合もあるが、それに加えて社会的な環境要因があって発病してくる。教職員の話を聞いてみると、確かに忙し過ぎるような気が

する。人間関係ももちろんあるのだろうが、雑務が忙し過ぎて心身ともに憔悴して、それを拒否するがためにうつ状態になっていくという方もいる。そういったことを考えると、教員の充足というのは非常に重要な点ではないかと考える。

人間関係がうまくいかないときや仕事内容に向き不向きがある場合、民間では転職をする。本当に嫌な目にあっても3年間じっと我慢すると、学校の教員も精神的に不安定になる可能性もあると思う。

校長と教頭が相談したうえで異動できるというか、人事交流というのは頻繁に行われるほうがいいのではないかと思う。

社会には事情があり、人事異動も容易にできるようにしたら社会のバランスが崩れないか。やはり3年なら3年、とにかく我慢してもらおう方向でいくのが妥当だと思う。

(「4. 学校や地域の教育活動を市民の力で支える」に関する視点)

先日の土曜日「まいなびフォーラム」が生涯学習総合センターであり、学校の空き教室を使っているという事例発表があった。保護者は家庭教育学級や授業参観とは別に、平日に学校に来ることで学校の様子がよく分かり、部屋でお茶を飲んだり、愚痴をこぼしながら仲間づくりができ、交流の場になっているということと、学校側は平日に保護者が学校に出入りするという点で、校内安全対策につながっているという発表だった。ほかの学校でもこのような活動が広がっていけば、学校・保護者・地域の横のつながりが持てるのではないかと思った。学校の積極的なオープン化では、今、体育館や校庭は遊び場等で開放されていると思うが、空き教室の利用というのがとても新鮮に感じた。

北九州市では、市民センターや広場などの整備をしていくということになるが、やはり学校の中で行う独自の意味はあり、例えば乳幼児の親子に触れるということは、子どもたちが次世代の親として何をするのかということであったり、子どもへの愛情の注ぎ方などが出てくるなどプラスの効果もあるので、市民センターもあるが、学校の教室を活用した乳幼児の居場所づくりを、月に何回かやってみる、ボランティアのクラブ活動をやってみるなど、いろいろな仕掛けを、学校の施設を活用して行ってみてはどうか。

常識的な範囲でトラブルがあったときに、学校の評議員でなくてもいいが、意見が食い違ったとき、社会常識的に意見ができるような機関があったらいいのではないかと思う。いきなり教育委員会とか公的なことにいくのではなくて、学校の中で生じたものは学校の中である程度の答えが出るのであれば、それが一番いいし、その次の段階で、学校支援地域本部などを活用したほうが、トラブルが緩和されるのではないかと思う。

学校は、基本的には保護者の方の苦情というものを真摯に受け止め、きちんとした対応をすれば分かってもらえる。お子さんをきちんといい方向に導こうとしているためだという思いを伝えれば、大体分かってくれる。ワンクッション置くようなシステムがあればいいだろうが、日本の中の社会では、今の段階ではうまく機能しないと思う。

学校問題対応支援体制の充実という点だけではなく、効果的な仕組みについての検討というような中身も入れておいたほうがいいと思う。

学校の問題に限らず、また、研修したらうまくなるというものではないが、初期の対応が非常に重要と思う。ジャッジに誰かが入り、双方の言い分を聞くと、どっちが正しいかなど分からなくなってしまうことがある。できるだけ早めに問題処理できるという機関があればいいのだろうが、なかなか難しい。

海外の例などを見ても、学校教育上のトラブルがあった場合は、当事者間の話ではなく、誰か1人専門家を置き、やはりスムーズに保護者と先生との仲を取り持つようなことが必要ではないかと思う。

空き教室の活用は、とてもうらやましいと思う。地域で子育て支援をしているサポーターの1人として、学校を使わせてもらいたいと管理職の先生方に打診しに行くが、先生が代わる度に話も変わる。オープン化をうたっていくのであれば、きちんとした引継ぎをお願いしたい。

(「5. 心の育ちの推進(青少年の健全育成を含む)」に関する視点)

正しい人格を形成するためには、知育、体育、徳育の三つがバランスよくなされなければならないと考えている。人格形成のために学力を知育で、体力を体育で、徳力というものを徳育と、この3つがバランスよく、教えていくということが大切だと思う。

徳育の対象ということで、人間に対してはやはり礼儀・節度を指導する。結果的に人間関係が良好になり、社会問題である「いじめ・引きこもり・自殺・うつ病」というものが防げる。社会に対する徳育というのは、公共性や規範意識。このことによって社会性、社会秩序が保持できる。大自然に対しては環境保全を指導していくということである。また、教師の養成機関の必要性ということで、現在の学校教育の「徳育」におけるもう一つの問題点は、それを教える人を育てていないということである。

企業では、ベテランの管理者が新入社員の教育指導に当たっており、新入社員がいきなり「現場」を担当することは基本的にない。教育の現場に出る前に、新卒の教師たち自身が徳育を学び、子どもたちへの指導方法も習得できる養成期間が必要と思う。また、研修等は、社会経験の豊富な方に行ってもらうなどの仕組みを考えてもらいたい。

これからの時代には、「自立」と「調和」の精神を育てていかなければならないと思う。自立をするためには、「学力」と「体力」が必要。そして「学力」と「体力」を生かし、まわりの人々や社会、自然界と調和するには「徳力」が欠かせないと思う。

心の育ちといったときに学校が最初にくると何か引っ掛かる。教育は乳児期から始まると思っている。子どもは生まれる前、生まれながら育つ、芽生えというものがプログラムされていると思う。それを発揮するためには、大人たちから愛されているという充足感を持つことが必要。それにより、自分自身も含め、人を信頼する心、信頼感ができ安定する心が芽生えたときに周辺のものにかかわり、これは何だろうというプログラムされた力が発揮できる。その愛する、愛されているという実感がない限り、心の育ちはあり得ないと思う。そう考えると、順序としてはちょっと違うのではないかと思う。

課題の中で「年代が上がるにつれて低下する子どもの規範意識」ということは、大人になるにつれて、「お父さんのまねをすればいい、お母さんのまねをすればいい」と大人のまねをするというようなことではないかと思う。このことは、まさに大人の問題をどうするかということであり、そこについて具体的な取り組みが必要ではないかと思う。「目指すべき方向性」の学校の部分で「適切な教材の選定」と書いてあり、読んでいくと引っかかる。これを見ると教材を選定することがすごく重要なように感じてしまう。実際には、大人、親自身のモラルというか規範意識にすごく危機感を感じている。子どもは大人の背中を見て判断するので、大人の規範意識のほうが最優先して取り組むべきことではないかと思う。

子どもたちの自治活動というか、意見を大人たちが耳を傾ける、受け入れる仕組みを充実させていく必要があると思う。例えばこうやったほうがいい、こういう社会になってもらいたい、大人たちがこう変わってもらいたい、親たちにこうしてもらいたいということを、子どもたちが声として、それを話し合い、まとめて大人たちに提供していくことも必要。今の生徒会や児童会のあり方自体や、学校でのあり方も少し見直していくことが必要と思う。子どもたちがそういった実力を付けていく、あるいは今の社会の、子どもたちの意見を尊重しながら見直していくというような位置付けが必要。

北九州市民全員で、こういう大人になってほしい、こういうまちになってほしいというイメージのもとに、こういう教育にしたいというイメージをつくったほうがよい。北九州の子どものイメージではない。10年、20年後の北九州市民はこういう大人になってほしい。それが20年、30年先の教育につながってくるのではないのかと思う。

また、教師の質の問題でいうと、人柄が良く、指導力があり、人のお世話、子どものお世話を良くしてくださる、そういう先生を北九州の中で求めていく。そういうことで、1歩でも2歩でもまちは変わってくるのではないのかと思う。

心の育ち、道徳教育では、教員の人間性を高めていくことが重要だと思う。教員の人間性を高めるためには、まず、新卒で採用された教師の教育というものが非常に重要だと思うので、具体的な取り組みの中で新採の教師を教育するなどのことがあってほしい。新規採用された先生は、現場での授業や学級指導を通して校内研究というシステムで1年間、計画的に研修等をしている。また、教育センター等を中心に道徳教育のあり方、や教科教育のあり方を具体的に学んでいくシステムがある。大事なことは、子ども一人ひとりに対する愛情であり、校長として子どもに対する言葉かけ、目の向け方、表情、子どもの発言に対する反応など通して教育とは何かということを指導している。

新採の教員の指導については、学校長監督の基に新採指導教員が指導する。例えば中学校では、その新採教員が理科である場合、理科の教員が、まず教科中心に学級経営からホームルーム、道徳すべてに当たる。

また、教職員に求められる資質や能力向上のために、教育センターの指導主事や教育委員会指導部の指導主事が指導に当たっている。なお、幅広く社会研修があるので、学校現場ではない所に出て行き、そこからの指導も受けている。

仕事には、向き不向きがある。教師という仕事は、決まった仕事になってくるから向かない人も必ずいると思う。企業でも毎週研修をやっているが、研修で技術や方法論は教えることができるが、リーダーシップなどは、もともと持っていないとできない。

また、問題への対応については、企業の場合、専門委員がいて対応するので非常に適切に対処できる組織ができていますが、学校教育という現場では少し難しいかと思う。

末吉前市長は、『実践都市経営』という本の中で、「北九州の教育は、大きな宿題として残している」と書いている。学校も市教委も一生懸命努力をしているが、非行も学力も一向に良くならない。これは施策が子どもの生活の乱れや、親子共々の規範意識の低下に追いつけない、対応できていないことだと思う。その中心はと言うと、基本的な生活習慣の定着と規範意識の向上の共有だと思う。基本的に大事なことは、子どもの生活を変えることであり、これが心の育ちの推進の中にあることは、ちょっとおかしいと思う。幼児期の教育における根本は何か、原因は何かということをやはり追求するべきと思う。例えば、妊婦に対して、あなたの生まれてくるお子さんはどうやって育てますかというような、相談や教育をすべきではないか。例えば、いろんな問題はあってもいいが、産婦人科の先生にお願いするような視点は考えられないものか。根本からいかなないことには、これからの10年先15年先は、うまくいかないのではないかと思う。

先生は聖職者だというような話があるが、おかしいと思う。先生だけがものすごく立派で、優秀で、すべての面で最高の人たちばかりが集まっていたら、世の中から全く離れた世界がそこにできてしまう。いろいろな人がいるという普通の組織であってほしい。ものすごく優秀な均質化した組織になったら、そこで破綻が起き、多分、荒れた子どもの心なんかは分からない、そこで、どうかしないといけないという感じになると思う。教師は、決して均質な人ということではなく、それぞれ特徴があっていいと思う。しかし、必要最低限のことはきちっとしておかないと、困るのは先生たちであり、親御さんなどがいた時に反応ができないと困ってしまう。先生たちが困っているから先生たちに教育をしておかないといけないと思う。

教科書だけで教えられるものではないので、適切な教材の選定というのは引かかる。また、保育所は、福祉の中の保育、幼児教育と思っているが、戦後の教育の中で、自由平等ということを教えられた。しかし、そこには、おかげさまとか感謝とかいう言葉がなかった。遠回りではあっても、やはり博愛というか、感謝というか、そういう教育が乳幼児期から小学校、すべてなされなければいけないと思っている。

教員の研修に関しては、研修をしていくということも重要だが、もう一つ重要な点が抜けている。教員が教師をして良かったと感じたり、あるいは自信を無くしたりするときは、保護者との関係ではないかと思う。指導という観点だけではなく、子どもの成長や変化など、喜びを分かち合えるように、共感できるように垣根の部分を下げて、保護者との関係を作っていく。同時に父親を巻き込んでいく、男性の参加ということも位置付けていく必要がある。この項目が落ちているので、重要ではないかと思っている。

教員は、学校の教科に専念するという状況が出てきていると思うが、PTA活動を通じた教員全体とのレクリエーションや、ふれあいの機会、あるいは、いろいろな行事に保護者も巻き込んでいくというような形で、教員と接する機会をできるだけ作っていくことを重視していかないと、人間性を高めるといふより、追いこんで厳しい状況になりかねない。研修と同時に具体的な取り組みの項目を起こしていくことも必要と思う。

公立・私立もあるが、基本的には義務教育の中にあるので、政治運動や社会運動と明確に区別し、「適切な教材」という言葉は、あって然るべきだと思う。その後が続くところで「各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間」というのを、一くくりに、「全教育活動を通じて」としたほうがよいのではないか。

（「6．特別支援教育の充実」に関する視点）

小学校で普通学級を担任し、特別支援コーディネーターをしているという先生が、他のクラスに支援が必要だと思われる子どもがいて、そのことを担任の先生に言ったとき、言われた先生は、自分の生徒だから自分で考えるという感じで、一切、助言を受けようとしなないという悩みを聞いた。そこで、特別支援コーディネーターをサポートする後ろ盾があるといい。例えば校長先生が間に入るなどがあれば、助言もしやすいと思う。特別支援コーディネーターへのサポートについては、校内の支援体制を整備していくということではないかと思う。全市的な相談体制の整備の中に、障害の早期発見、早期支援に向けた支援体制の確立とがあるので、この中に含まれてくるかと思う。1対1で「あなたのクラスこんな人がいる」と言ったら、先生もプライドがある。上手に体制を整えていく必要性という部分では、最初の全市的なものの中に入ってくるという気がする。

（その他の視点）

第2章の「家庭、学校、地域への期待と連携のあり方」の中で、家庭への期待、学校への期待、地域への期待、これが最も重点的にならなければいけないと思う。やはり家庭の役割、地域の役割、学校の役割を明らかにすることが先でありこれが不十分だと思う。例えば、それぞれの果たす役割のキーワードを明らかにすることが必要。

家庭の問題では、やはり幼児教育が一番大事だという識者の意見もある。子どもの成長した現実を見ると、親の愛がない子どもと、親の愛がある子どもが一番差が出るという話もある。幼児教育を徹底して行うような方向付けをしたらいいのではないかと思う。一般的な論においては、このような会議で目指すところは大体一緒だと思う。そうであれば、特徴を出すという意味で、北九州ではこれをやるという形で打ち出せば、それが北九州方式というような感じになるのではないかと思う。これはすべての項目において言えることになるのではないかという意見を持っている。

第2章の「3．取り組みを進めるにあたって」の表は、すごく分かりやすくていいと思ったが、長い目で見ると、単に学力検査等の指標だけで見ないとなっている。ぜひ、長い目で見るといふ視点を入れてもらいたい。